

講演原稿

- ・はじめまして。私は前田光繁と申します。中国八路軍（今の人民解放軍）にいたときは杉本一夫と言っていました。あした100歳になります。
本日は私の話および戦後解放軍に参軍した人の座談会に、大勢の方にお集まりいただき、ありがとうございます。
- ・それではさっそく私の日中戦争中の反戦活動について、お話をさせていただきます。なにぶん100歳になり、話がはっきりしないところがあるかと思えます。お聞き苦しいところは予めご容赦をお願いいたします。
- ・私は1916年（大正5年）9月25日、京都の友禅染め親方の子として生まれました。5人くらい職人がいました。小学校卒業後、2年の高等科に進みましたが、先生とけんかして1年で学校をやめ、奉公に出て、夜学の京都市立商工専修学校に5年間通い、卒業しています。
- ・1935年海軍に志願し、呉海兵団に入隊し、重巡古鷹の電気課に配属になりました。ところが、1年余りで胸膜炎にかかり退団させられ、兵役免除になりました。
そのまま乗船していたら、太平洋の藻屑（もくず）となっていたところです。
- ・そこで満州に行って一旗揚げようと考えました。
- ・1937年6月、満州の奉天（現瀋陽）に渡り、満鉄に入社しました。
- ・日中戦争がはじまり、1938年春、より前線の近くに行きたくて、保線作業現場監督になり、中国京漢鉄道の現場におもむきました。
- ・1938年7月29日の真夜中、京漢線石家荘の北の河北省南部の双廟駅近くの砂利採取村で、ぐっすり寝ているところを八路軍の遊撃隊に襲われ、がんじがらめに縛りあげられ、捕虜となりました。
- ・この時遊撃隊の隊長に、私の口の中へモーゼル拳銃の銃口を突っ込まれ、もうダメかと思いました。でも彼は引き金を引きませんでした。
- ・その後約2週間、八路軍前線基地で過ごしましたが、私としては、当然殺されるものと考え、いつ殺されるのかが頭を離れません。
- ・この前線基地であった二人の八路軍の幹部から「八路軍は捕虜を殺さない。」と言い、朱徳総司令、彭徳懐副司令の連名の命令書を見せられました。その命令書には、「日本人捕虜を殺さず、優待するように。」と書かれていました。なるほど、拘束されていないし、食事についても八路軍の兵士より優遇されていることは、もう分かっていたましたが、殺さないということは到底信じることができません。
- ・約2週間後、更に後方の根拠地になっている河北省渉県王堡村で、張香山さんが迎えてくれました。彼は当時八路軍第129師団政治部敵軍工作科長でした。張香山さんは後に、中日友好協会の副会長になっています。
- ・張香山さんとは十数日間二人で同居生活を送ることになりました。
そこでまた、いつ殺すのか、いや殺さないという話になります。
- ・殺されないということでは、私は逆に困ったことになる。私は自決しないといけないこと

になる。「生きて虜囚の辱めを受けることなかれ。」と教育を受けてきており、それが男の道と信じているというのが当時の私の考えでした。

当時の日本人は皆この教育を受け、信じ切っていたのです。私もその例外ではありませんでした。

- これに対し張香山さんは、「私に殺せと言われても殺すことはできない。日本のことわざに、「死んで花実が咲くものか。」というのがあるでしょう。ここは焦らず、時間をかけて、ゆっくり考えようではありませんか。」と言います。
- こんな話を延々と繰り返す日々でしたが、実は家にノミがたくさんいて、八路軍に殺されなくても、ノミに殺されると訴え、さらに後方の抗日根拠地の最終地点に一つの、山西省の東南部の貧しい農村にある、八路軍野戦政治部に移動になりました。
- 八路軍野戦政治部につくと、2～3日前に到着したという日本人、小林武夫がいました。彼は後に一緒に八路軍に参軍することになります。ここでは日本語の流ちょうな幹部たちがいて、毎日訪ねてきては論争です。敵工部の蔡前部長、漆克昌科長、江右書幹事、陳幹事がいました。毎日の論争で平行線をたどる中、本を読まないかと誘われ、小林多喜二の蟹工船などのプロレタリア文学を読み、八路軍内の様子も分かってくるなど、日本軍との違いを認識するようになっていきました。
- この過程のさなか、後にもう一人の日本人参軍者になる、岡田義雄が加わってきました。
- 捕虜になって数か月後の1938年の晩秋のころ、日本兵捕虜を殺さないよう八路軍の戦闘部隊や前線地区の民衆に徹底させるため、前線を一緒に回って欲しいとの提案を受け、私、江右書、小林の3人で前線を回ることになりました。ある時、村が焼かれ一家5人が殺された直後の沿線の村に着きました。初めて日本軍の蛮行現場を見たのです。ああ、これは日本軍のやっていることは正義ではない。中国の抗戦が正しいことなのだと身をもって知ったのです。
- 捕虜になって5か月余り後の1939年（昭和14年）1月2日、山西省東南部（たぶん武郷県王家峪村かその周辺）の八路軍野戦司令部の新年祝賀会において、3人の日本人が演壇に飛び出して、八路軍に参加することを宣言しました。私、小林武夫、岡田義雄の3人です。通訳は漆克昌さんです。私たち日本人3人の参軍声明に対し、八路軍総司令の朱徳さんが歓迎演説をしてくれました。
- 私たちの八路軍内の処遇は、敵工部の幹部待遇で、小・中隊長級の扱いです。半日学習、半日仕事の毎日です。仕事は、日本軍向け反戦ビラの文書作成、
新しく来た日本軍捕虜の管理と教育、
敵工部幹部訓練班への日本語教育
などです。
- 効果としては、
反戦ビラの日本語が日本人から見たらおかしかったものが、正しい、わかりやすい日本語になった。

前線から送られてくる日本兵捕虜が多くなり、他の地域でも参軍する者が出てくるなど、効果は相当あったと思います。

- ・活動する最中仲間は7人となり、鹿地亘さんが重慶で日本人反戦同盟を作ったというニュースを聞き、連携すべく手紙を送りましたがいっこうに返事がきません。
そこで、1939年11月7日のソビエト10月革命記念日を選び、山西省遼県麻田鎮で、「**覚醒連盟**」の創立式典を行い、会長に私が就任しました。
この時も朱徳総司令がお祝いに駆けつけてくれました。
- ・その後、1940年、1941年と組織が拡大していきました。
前線の各抗日根拠地のほぼ全部に支部ができました。
- ・1942年夏、私が延安に行く前、1940年10月、私は日本人として初めて火線（戦闘現場のこと）に出て日本軍への生（なま）の呼び掛けを、自ら申し出て実行しました。
- ・百団大戦の最中の戦役の一つ、「**関家瑠(グアンジャロ)**戦役」です。山西省東南部武郷県城の東です。日本軍第36師団百武部隊岡崎大隊約1,200名を包囲し、ほとんど殲滅した戦闘です。
- ・彭徳懐副総司令の総指揮の下、戦場での指揮は、劉伯承將軍、鄧小平政治委員、第129師団第385旅団、第386旅団直屬隊、迫撃砲隊、および元国民党軍で八路軍に合流していた平漢縦隊で構成されていました。
羅瑞卿將軍を主任とする野戦政治部もすぐ近くに陣取り、その中に私もいました。10月29日私は戦場指揮部で劉伯承將軍、鄧小平政治委員、蔡政治主任の姿を目撃しており、蔡主任から呼びかけに細心の注意を払うよう声をかけられています。
- ・10月29日の昼間の呼びかけは、現場が激戦中で、日本戦闘機が機銃掃射を撃ってくるなど、あまりに危険なため断念し、真夜中、最後の総突撃の前、八路軍は射撃を中止して、真っ暗闇の中、私が手作りのメガホンと取って、敵前50メートルくらいのところから、反戦と投降の呼び掛けを行いました。残念ながら返事はありません。
- ・いつか経過後、総攻撃のラッパが鳴り、最後の戦闘が始まりました。
- ・こうして岡崎大隊をほとんど殲滅して、戦闘が終了しました。岡崎大隊長戦死。日本軍の救援隊1個大隊が駆けつけたため、50数人が殲滅を逃れました。
- ・後に負傷して捕虜になった日本兵が1名私のところに送られてきましたが、はなはだ頑迷でありました。しかし、彼は後に終戦時、自ら日本軍拠点に乗り込み、武装解除の説得をするほどの勇敢な反戦兵士に変わりました。
- ・1942年8月、延安で日本兵士代表者大会と全華北反戦大会を開催することになり、前線の各支部は、代表を送ることになりました。
- ・日本兵士代表者大会では、兵士の要求書を発表。ビンタをとるな等、日本軍内の日頃の兵士虐待を批判したものです。
全華北反戦大会では、各地にできていた覚醒連盟と反戦同盟を合体して、日本人反戦同盟華北連合会に統合し、私は代表の一人に選ばれました。
- ・大会後、元の場所に戻る者、延安に残る者と別れ、私は延安に残り、野坂参三さんの下で本部の仕事、日本労農学校の学生兼教育幹部として活動しました。

- ・1945年9月までの約3年間の私の延安生活について、若干のトピックスをお話しします。
- ・1つは、毛沢東主席が日本労農学校の学芸会に来られ、私が案内係、接待役を務めたことです。そのとき握手をしたのですが、今もその感触を忘れていません。
- ・1つは、延安では夏の土曜日の夜、八路軍の幹部が集まって、屋外でダンスパーティーが行われていて、私も何度か行ったことがありました。毛沢東主席、朱徳総司令、周恩来さんなどの名だたる方が踊っていました。私はダンスが踊れないので、見ていただけです。もちろん江青さんが踊っているのも見えています。
- ・1つは、朱徳総司令がたびたび日本労農学校にやってきては、時事問題などの講義をしていただいたことです。
- ・話を元に戻します。
- ・日本労農学校は私が延安に着くよりもずっと前の、1941年5月15日に開講しています。

校長は 王学文さん（政治経済学者、大学教授）、

副校長は、初代 李初梨さん、2代目が 趙安博さん（元日本留学生）

講師に、何思敬さん（京都大学出身教授） などの方がおられました。

のちに日本の中国大使館に赴任してきて、惜しくも日本で病いで亡くなった王暁雲さんは、このころは延安の敵軍工作幹部学校の学生でした。王暁雲さんは東京の私の家に何度か来ていて、夕食を共にしています。

- ・やがて1945年8月15日終戦を迎えます。
- ・1945年9月18日、二百数十名の解放連盟員と労農学校生は、朝鮮経由で日本に帰るため、徒歩で東北地方を目指して、延安を出発しました。
- ・隊長は長征に参加した老幹部の劉さんで、私は副隊長でした。
- ・華北を目指して、河北省承德、遼寧省義県を経て、1945年12月中旬過ぎ、新民に到着しました。そこで延安から奉天に先行し引き返してきた李初梨さんに会い、この地区に数十万人の日本人難民がいて、多くは食うものに困るほど生活に困窮していると聞かされ、我々の一部分は暫時東北地区に残り、日本居留民・難民問題に取り組むことになりました。
- ・私は、李初梨さんより、暫時中国に残り中国航空総隊創設に協力して欲しいとの要請を受けました。私は一刻も早く日本に帰りたかったのですが、やむを得ず、通化に向かうことになりました。
- ・民主連軍司令部の政治委員になっていた彭真氏の紹介状を手に、1945年12月20日前後、通化に到着。同行したのは日本労農学校生の元陸軍曹長の金野さんです。しかし彼は通化への移動中の列車の中で発熱し、高熱を出し、通化に到着してすぐ省立病院に入院しました。発疹チフスでした。その病院長が元通化陸軍病院長の柴田大尉であり、彼が二三暴動の首謀者の一人であったため、金野さんは毒殺されてしまったことが後で分かりました。
- ・通化で、朱瑞将軍、呉溉之将軍に面接したり、中国航空総隊の目的や概要、構成、林弥一郎日本空軍部隊の参軍した経緯などの説明を受けました。政治部副主任兼大隊政治委員の

任命状を受け取りました。

- ・正月を過ぎて間もないころ、私は朱瑞司令員の西安行きの随行を命じられ、西安に10日間ほど滞在し、その間通化にはいませんでしたが、この間に金野さんが毒殺されたのです。
- ・八路軍側には二三暴動の情報は、2月2日の午後まで全くない状況でした。2月2日午後八路軍にようやく暴動の情報が入り、迅速な行動で国民党の主犯孫耕暁を逮捕し、他の中心人物もかなりの数逮捕できましたが、日本側の首謀者藤田大佐元関東軍125師団参謀長は逮捕できず、2月3日午前4時、暴動が始まってしまいます。
- ・八路軍主力の留守を突いた暴動は、あと一步のところまで成功しかけましたが、急きょ戻ってきた八路軍主力に鎮圧されます。
- ・林航空隊隊長は2日の夜、部下から暴動計画の情報を受け、私に電話で知らせてくれ、隊員の多くを一堂に集め、外から朝鮮部隊に監視させ、私は司令部に行きました。
- ・このため暴動側が期待した林航空隊(300人)の参加は、林隊長の動くなどの指示の下、士官3名に限られ、航空隊隊員は無事でした。
- ・その後中国軍人へのパイロット教育は順調に進められていきました。
中国空軍の創設に、日本の林航空隊のパイロット、整備員の皆さんが貢献されたのです。
- ・1949年10月1日、中華人民共和国建設を毛沢東主席が天安門で宣言した時、中国空軍の飛行編隊が天安門の上を飛行しましたが、その時のパイロットたちこそ、林航空隊の方々の教育指導を受け、成長した教え子たちでした。
- ・林航空隊による中国人パイロット養成の任務は1953年に終了し、ほとんどの隊員は日本に帰りました。
- ・私はこの時、一部の方々とともに中国に残り、北京郊外に建設されたマルクス・レーニン主義学院第2分校に行き、教務副主任に就任し、1957年学院の終了まで、ここで教育・学習活動をしていました。校長兼教育主任は高倉てるさんでしたが、彼の帰国後、連貫さんに代わりました。連貫さんは当時台湾問題の責任者でした。
- ・学院の終了後私は上海に移動し、1958年6月の日本帰国まで学習生活を送りました。
- ・中国に残留していた日本人の最後の集団帰国が6次に渡って実施され、1958年(昭和33年)6月、私は5次で白山丸に乗り、1家4人で日本の舞鶴に帰ってきました。私が41歳の時で、妻と子供は初めての日本です。
- ・私は日本に帰ってきたら、当然のこととして日本共産党本部で活動するものと思っていたのですが、野坂さんから、しばらく待たと言われて、民間で仕事をしながら、一共産党員として地域の活動をしていました。
日本共産党指導部内の権力闘争の中で、中国帰国派は冷遇されており、とうとうお呼びはかかりませんでした。
- ・その後、文化大革命の影響を受け、私を含めて中国派は除名されます。
- ・他方、私は帰国以来一貫して日中友好活動を続けてきました。
- ・私の経験からみて、日本人の平和な生活を維持・発展させていくためには、日中は絶対に敵対し、戦争をしてはダメだということ。戦争をしないためには、国家間の交流も大

事ですが、民間レベルにおいても、お互いが相手の考え方を理解し合い、交流を欠かさないこと。日中関係の最悪の時期である先の日中戦争のときであっても、心ある人は反戦のため連携してきていると話してきています。

次世代を担っている皆さんは、このことを是非心にとめておいていただきたい。そして、実際の行動につなげていただきたいと思います。

これで私の話を終わります。

長時間傾聴していただき、ありがとうございました。